

# 加茂物狂

ワキ 狂女の夫

シテ 狂女

地は 京都

季は 四月

「帰るうれしき都路に。く。雲井ぞ長閑けかりける。

「是は都方の者にて候。我東国一見の為め罷り下り。こゝかしこに月日を送り。早三年になりて候。又都の事もゆかしく候ふ程に。此度都へ上らばやと存じ候。

「雁金の。花を見捨つる名残まで。く。故郷思ふ旅心。憂きだに急ぐ我方は。さすがに花の都にて。

海山かはる隔てにも。思ふ心の道の辺の。便の桜夏かけて。詠めみじかきあたら夜の。花の都に着きにけり。く。

「面白や今日は卯月の取りぐに。千早振る其神山の葵草。かけて頼むや其恵み。色めきつゝく人並に。あらぬ身までも急ぎ来て。

「今日かざす。葵や露の玉葛。

「かづらも同じかざしかな。

シテ  
「かざす袂の色までも。

地  
「思ひある身と人や見ん。

シテサシ  
「おもしろや花の都の春過ぎて。又其時のをりから  
も。

地  
「たぐひはあらじ此神の。誓ひ糺の道すがら。人や  
りならぬ心々の。さまぐ見えて袖をつらね。裳  
裾を染めて行きかふ人の。道去りあへぬ物思ふ。

下歌地  
「我のみぞ。猶忘られぬ其恨み。

上歌  
「人の心は花染の。く。うつろひ易き頃も過ぎ。

山陰の。加茂の川波糺の。森の緑も夏木立。涼し  
き色は花なれや。忘れめや。葵を草に引き結び。  
仮寐の野辺の露の曙。面影匂ふ涙の。ためしなれ  
や恋路の。身は替はるまじなあぢきなや。く。

ワキ詞  
「如何に是なる狂女。今日は当社の御神事なり。心  
を静めて結縁をなし候へ。

シテ詞  
「是は仰せとも覚えぬものかな。これも狂もよく思

へば聖と言へり。其上神は知ろし召すらん。正直  
捨方便の御恵み。塵に交はる和光の影は。狂言綺  
語も隔てあらじ。あら愚かの仰せや候。

ワキ「実に此言葉は恥かしや。讃仏乗の心ならば。何は  
の事も愚ならじ。しかも是なる御社は。当社に取  
りても異なる垂跡。舞歌を手向けて乱れ心の。望  
を祈り給ふべし。

シテ「そも此社は取り分きて。舞歌を納受有る事の。其  
御謂は何事ぞ。

ワキ「是こそさしも実方の。宮居給ひし粧ひの。臨時の  
舞の妙なる姿を。水にうつし御手洗の。其縁ある  
世を渡る。橋本の宮居と申すとかや。

シテ「あら有難やと夕波に。

ワキ「今立ち寄りて。

シテ「影を見れば。

地「現なや。見しにもあらぬ面影の。く。衰へ果つ

る粧ひは。及ばぬ昔のそれのみか。身にも顔ばせ  
の名残さへ。涙のおちぶるゝこそ悲しき。今は逢  
ふとも中々に。それともいさや白露の。命ぞ恨め  
しき。命ぞ恨みなりける。

ワキ詞

「是なる者を如何なる者ぞと存じて候へば。某が  
たらひたる女にて候。今は人目もさすがに候ふ間。  
さあらぬ体にもてなし。人間を待ちて名乗らばや  
と存じ候。如何に狂女。此社にて舞をまひ。思ふ

事を祈るならば。神もや納受あるべきぞと。

シテ

「風折烏帽子かりに着て。

ワキ

「手向の舞を。

シテ

「まふとかや。

地次第

「又ぬぎかへて夏衣。く。花の袖をやかへすらん。

シテ

「山藍に。摺れる衣の色添へて。

地

「神も御影や移り舞。

シテサシ

「実にやそのかみに祈りし事は忘れじを。

地「あはれはかけよ加茂の川波。立ち帰り来て年月の。  
誓ひを頼む逢瀬の末。

シテ「憐み垂れて玉簾。

地「かゝる気色を守り給へ。

クセ「我も其。しでに涙ぞかゝりにき。又いつかと思  
ひ出でしまゝ。涙ながらに立ち別れて。都にも心  
とめじ。東路の末遠く。聞けば其名もなつかしみ。  
思ひ乱れし信夫摺。誰ゆゑぞ如何にと。かこたん

とする人もなし。鄙の長路におちぶれて。尋ぬる  
かひも泣くく。其面影の見えざれば。猶行く方  
の覚束なく。三河に渡す八橋の。蜘蛛手に物を思  
ふ身は。何処をそこと知らねども。岸边に波を掛  
川。小夜の中山中々に。命の内は白雲の。又越ゆ  
べしと思ひきや。

シテ「花紫の藤枝の。

地「幾春かけて匂ふらん。馴れにし旅の友だにも。心

岡部の宿とかや。鳶の細道分け過ぎて。着馴衣を  
宇津の山。現や夢になりぬらん。見聞くに付けて  
憂き思ひ。猶こりずまの心とて。又歸りくる都路  
の。思ひの色や春の日の。光りの影も一しほの。

シテ「柳桜をこきまぜて。

地「錦をさらす縦緯の。霞の衣の匂やかに。立ち舞ふ  
袖も梅が香の。花やかなりし春過ぎて。夏もはや  
北祭。今日又花の都人。行きかふ袖の色々に。貴

賤群集の粧ひも。ひるがへす袂なりけり。

地「月にめで。（舞）

シテ「月にめで。花を詠めしいにしへの。

地「跡はこゝにぞ在原なる。

シテ「其業平の結縁の衆生に。

地「契り結ぶの。

シテ「神とや岩本の。

地「もとの身なれど仮の世に出でゝ。月やあらぬ。春

や昔の春ならぬ。春ならぬ思へば我も。

シテ  
「唯いつとなく。」

地  
「唯いつとなく。そことも涙のみ思ひ居りて。我身  
一つの。憂き世の中ぞ悲しき。」

ロンギ地  
「始めより。見れば正しくそれぞとは。思へど人目  
つゝましや。」

シテ  
「人目をも。我は思はぬ身の行方。心迷ひの怪しく  
も。さすがにそれぞと知るけしき。恥かしければ

言ひあへず。

地  
「よしや互に白真弓。帰る家路は住み馴れし。」

シテ  
「五条あたりの夕顔の。」

地  
「露の宿りは。」

シテ  
「心あてに。」

地  
「それかあらぬかの。空目もあらじあらたなる。神  
の誓ひを仰ぎつゝ。さらぬやうにて引き別れて。

此河島の行末は。逢ふ瀬の道になりにけり。く。



底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション 『謡曲評釈 第三輯』 大和田建樹 著